# 式辞

輝く陽光、爽やかな風薫るなか、木々の青葉がいよいよ繁りゆくこの佳き日に、海老原洋子同窓会長様、梁瀬剛ＰＴＡ会長様、堀口芳明教育振興会長様をはじめ、ご来賓の皆様のご臨席を賜り、未だ新型感染症への警戒に予断の許されない状況ではありますが、十分な感染症対策を行いながら、いよいよ全校生徒参加のもと、群馬県立高崎女子高等学校、第百二十三回開校記念式を執り行うことができますことは、本校にとりまして大きな喜びであり、あらためまして、これまで本校教育の充実・発展のために様々にご尽力頂いた関係各位にこの場を借りまして感謝申しあげる次第です。

さて、創立記念日は、人で言えば誕生の日であり、誕生の日は、恙なく今日の日を迎えられたこと、自身のために力添えを頂いた方々に深く感謝をいたす日であります。そして、これまでを振り返り、明日への新たな展望を得ることが肝要であることを踏まえ、本校の歴史を振り返ることといたします。

本校の歴史は、明治三二年、一八九〇年設立の「群馬県高等女学校」に遡ります。当時開校されていた公立の女学校は、関東においては、東京、そして栃木にあるばかりであり、全国においても僅か二九校に過ぎず、群馬県の高等女学校設置が進歩的な取組であったことが理解できます。これが、高崎女子高等学校の前身であり、高女の誇り高い歴史はまさにここから始まることになるのですが、今でこそ、女性の社会進出などという言葉自体が陳腐な表現に思えるほど、多くの女性たちが、無論性別に関わらず、わが国の根幹を支えている現実を否定できない時代ではありますが、明治という時代背景を考えるとき、女子中等教育に関しては、決して楽観的な見方の許されない時代でもあり、それはここ高女においても同じことでありました。

それを思うとき、「群馬県立高等女学校」が、百二十年あまりの時を経て、発展の歩を決して止めることなく、現在の「群馬県立高崎女子高等学校」に至っていることは、決して当たり前のことではなく、そこには、地域社会の支援のみならず、鋭意指導に当たってきた全ての学校関係者、就中ここ高女で学び、次代を担う有為な人

材として育っていった多くの卒業生たちの活躍なくしてはなしえなかったことであるあることを諸君は決して忘れてはなりません。それは、創立当初から真摯に学びに向かう生徒たちが集う教育機関として、確かな実績を積み上げることができたからに他ならず、直近で言うならば、高い目標を掲げて自分自身の可能性に挑んだ卒業生たちの背中に君たちが何を見たかということであり、百二十三年の遠大な歴史もそうした一年一年の襷のつながりであること、そして、受け継いできたその襷こそが、現在に受け継がれる、県下初の女子教育機関としての誇りと覚悟を示した校訓のひとつ、「向学叡智」なのです。

「向学叡智」、教育機関として十分な指導体制を備え、生徒は真摯に自身の資質向上と能力開発に取り組み、確実に実績を積み上げていくこと、無論、これは容易なことではないでしょう。しかし、開校記念の日に当たり、君たちが心に誓うべきは、素晴らしい伝統を驕ることではなく、高邁な理想を掲げ、ともに新しい高女を創り上げようとする熱い意気を示すことの他にないはずであります。そのためには、私たち教職員も、日々の研鑽を怠らず、不断の指導改善によって、君たちの意気に応えなければなりませんし、君たちはその指導の下、日々邁進し続けていく以外に道はないのです。高女にどんな未来が待っているのか、その答えは君たち自身の中にあります。しかし、何も恐れることはありません。一人ひとりが自分自身の可能性を信じて挑戦するだけです。新しい高女を創るのは君たちを他においていないのです。

結びになりましたが、同窓会長様をはじめ諸先輩方、そしてＰＴＡ会長様をはじめ、本校関係の皆様におかれましては、まことに勝手ながら、今後とも高女の強力な応援者として、ご支援賜りますようお願いを申しあげるとともに、高崎女子高等学校の益々の発展、そして生徒諸君の大いなる飛躍を祈念して、開校記念式の式辞といたします。

令和四年四月二十八日

群馬県立高崎女子高等学校長　濱野　雅樹